せつじょう 幾許もせず別離の時は来て、 降りしく雪は終るを知らず、 されど陽光は日毎に増して、 寮で過ごせし日は想出となる。 春の訪れを微かに予感う。 未だ窓下には白銀の町。

若き我等の熱き血滾らせて、ひたすらに只青春を歩みて行かん。 去りし寮友との月日胸にして、新たなる一年の扉を開く。 生命の鐘声は北都を巡り、長き寒冬の影は消え往く。いのちかね。ほくと、めぐ、ながかんとうかげきしゅ 残雪融かす春風吹きて、 原始林陰に萌ゆる新芽は踊る。